

心の熱い人は磁場をもっている。 磁力に惹かれ、集うのだ。

コロナウィルスの全国的な感染は二年間も続き、その影響は政治、経済、オリンピックなどに及び、深刻化している。コロナ禍におかれた田舎では、人口減による停滞から抜け出そうと、取り組む再生活動にも影響が出ている。

八年前、「かやぶき山荘・格山」の営業開始から始まった再生への試みは、「鎌鼬美術館」の開設、古民家の「かやぶきの宿」へのリフォーム、農家キッチン「あるもんで」の活動、そして、移住する人が増えるなど、喜ばしい動きが見えるようになった。その再生活動の中核を担っている阿部久夫さんから、現状認識と将来の見通しを聞いた。

田代の将来は「鎌鼬」と「かやぶき」

に託される、と阿部さんは認識している。格山のリーフレットを制作したとき、「鎌鼬」の写真使用の許可を細江英公氏から得て、その後、美術館建設の動きになった。芸術祭の開催や、土方巽の資料を田代小学校へ移す作業が行われている。コロナ禍の自粛規制で、海外からの舞踏ファンと首都圏のお客さんは無くなったが、秋田市、本荘市、大仙市など県内の来訪者が増えているという。

かやぶきの宿「古庭屋」へのリフォーム工事は、竣工が近づいてきた。主の小林さんが、廃屋同様であった民家の片付け作業を始めてから、五年目を迎える。ゴミにうずもれた室内を眺めたとき、「やり遂げられるか…」と私は不安を抱いたが、小林

さんの熱意とパワーで乗り切ったのだ。屋根ふきの技術を身に付けて茅を刈り集め、稲架掛けを覚えながら稲づくりをするなど、「かやぶきの原風景」や「循環農業」という田代の伝統文化を再生する情熱には、圧倒される。阿部さんは「小林さんの事業の行く末に、田代の未来がある」と語っていたが、村おこしの佳境はこれからなのだ。

「村おこし」は「人おこし」とも言われるが、過疎地への移住のきっかけは、その土地柄と人間性であろう。

NPO法人鎌鼬の会や田代に住む人たち、そして、阿部さんや小林さんなど、心の熱い人は「磁場」を持っている。磁力に惹かれ、集うのだ。